

「ふるさと春日井学」研究フォーラム

Forum for Furusato Kasugai Studies

「ふるさと春日井」まちづくりへの応援メッセージ

『ふるさと意識なくして地域の活性化なし』

会報

NO. 50

2017.4.5発行

編集責任：河地 清

Kawachi-k@mb.ccnw.ne.jp

第50回「ふるさと春日井学」研究フォーラム

テーマ『地域活性化の本質的方法論』

平成29年3月5日（日）市民活動支援センター（ささえ愛センター）において「ふるさと春日井学」研究フォーラムをテーマ『地域活性化の本質的方法論』と題して本会会長河地 清氏に講演していただきました。

第50回の節目に、4年間の講演を総括していただいた。これまで講師となられたのは67人で、文化・歴史、自然・地勢、まちづくり、商店街活性化などさまざまな分野で研究されてきた内容を披瀝いただいた。ただ、個々の発表の連関はなく、講師・講演テーマの依頼者（主催者）側でなにがしかの狙いはあったものの、発表者各自は、自分の研究報告を真摯に語られた格好である。「ふるさと春日井学」はその中で構築される試みである。その中から、いくつかの「知見」を取り出し、「ふるさと春日井学」の構築、特に「地域活性化の本質的方法論」について試論を展開して講演された。

講演内容は、氏の勤務（非常勤講師）される修文大学研究紀要に実践報告論文として寄稿したと報告がありました。

参加者は19名でした。



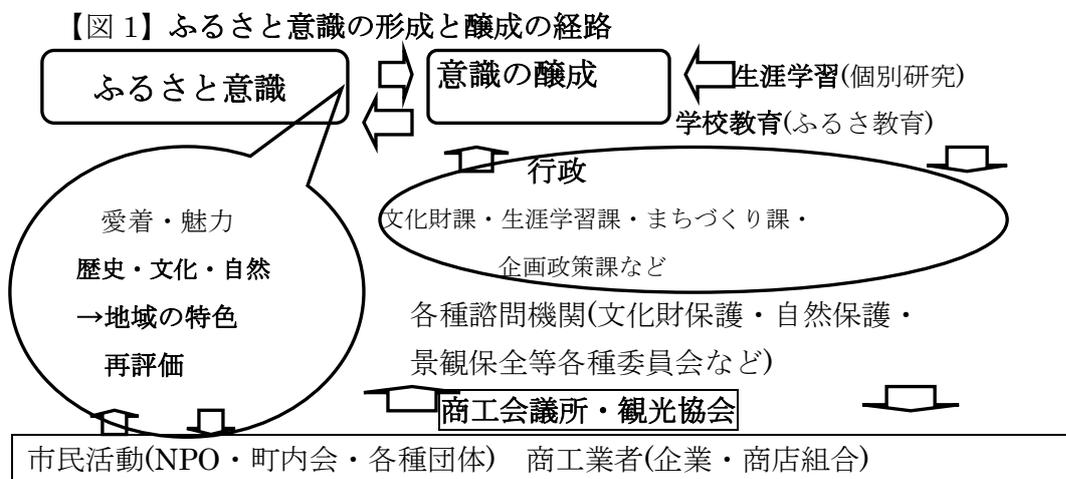
会場風景

講演：河地 清 氏

－発表要旨－

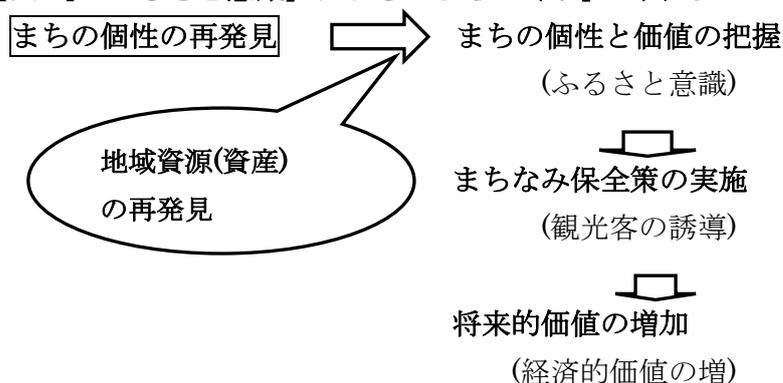
I. (1)高度成長期以降に盛んになった「地域活性化とまちづくり」は産業振興の目的で展開されたもので、地域経済学やマーケティングによるものがほとんどで、社会的なものはほとんど含まれていないとし、視点の転換と新しい発想が必要だとする。「ふるさと意識」が地域活性化の起点であり、そこからの各種の展開の相関関係が新しいものを生み出す力になると主張し、着目する。

図1の「ふるさと意識の形成と醸成の経路」の関係図は、2013年8月に発表された阿部耕作氏の近江八幡市での実践報告と2016年10月に発表された鳥羽都子氏の「長浜市のまちづくり」分析(2007年、文化経済学会論文)を参考に作成されたもの。



(2)河地氏は「歌謡史からみえる民衆意識」を明治21年のスコットランド民謡「故郷の空」(夕空はれて 秋風吹き…)から、明治40年の「故郷の廃屋」、明治43年の石川啄木「一握の砂」(ふるさとの山に向かいて言うことなし…)、大正2年のドイツ民謡「故郷を離るゝ歌」(…さらばふるさと ふるさとさらば)、大正3年の高野辰之「兎小石かの山…」など絶望的な、時に、見放された故郷の思いの反映された歌謡などが含まれている。昭和40年の井沢八郎歌の「あゝ上野駅」(どこかに故郷の香りを乗せて…)はどこかに希望のある故郷が歌われている。昭和48年の五木ひろし歌唱、平尾昌晃作詞の「ふるさと」(…故郷が日暮れりゃ こいしくなるばかり)、昭和52年の千昌夫歌唱、遠藤実作曲の「北国の春」、同年のさだまさし歌唱の「案山子」(…お前がここをでてからはじめての春 手紙が無理なら電話でもいい…)、平成23年の新沼謙治歌唱「ふるさとは今もかわらず」は「ふるさと」に対する意識の原点と精神の内面を端的に表現していると、ふるさとに対する思いは斯くあるべきと訴えるところととらえる。今日の「ふるさと観」を見事に表現している。人間の生きる原点を歌いあげていると、ほれ込んでいる。昭和40年以降は高度経済成長期以降の社会状況を背景にした「ふるさと意識」を表現した歌だととらえる。

【図2】「ふるさと意識」による「まちづくり」の図式



II. 「ふるさと春日井学」研究フォーラムの実践から得た知見

(1) 「書のまち春日井」から得た知見 … ①滋賀県の小野道風神社の拝観と三井寺の天台座主小野明尊の居所長等寺などのバスツアー見学②地元書家3人による「書の魅力」講座③京都北山の小野道風廟、東山の道風の終焉の雲居寺跡の見学ツアー④伝道風誕生地の松河戸の人々が90年も続けてきた揮毫大会と道風顕彰のための「松河戸誌研究会」の取り組みの紹介を得て、「書のまち」にふさわしい景観づくりや道風記念館を「まちづくり」の拠点とすることを期待したい。これらは、広く市民を巻き込み、「書のイベント」を今以上に企画すべきこと。グローバルな視野で春日井市域と書のイメージを発信していくことなど提案したい。以上の考えに即して、鳥居松では商店街による「街角メッセージ」(95本の街路灯に書を貼り付け)の取り組みが始まった。また、市議会では、ある市議がわれわれの主張する方向で一般質問の形で「書のまち」の具体的な提案を行った。

【図3】「まちづくり」の類型

- ・都市開発型—国土計画(ニュータウン建設)
- ・都市優先型—まちづくり株式会社
- ・観光開発型—観光地中心
- ・地場産業振興型—伝統・文化に根ざす
- ・行政主導型—補助金助成・地方創生政策
- ・価値創造型—ふるさと意識・持続可能な「まちづくり」、市民協同型、Venture型・エリアマネジメント型

(2) 春日井市には平和宣言都市の碑が建てられている。名古屋陸軍工廠鷹来工場本部司令棟が残るが、その「歴史的戦争遺構の保存」について学習し、大学の施設として残る遺跡の重要性を広め、とりあえず残せたことに貢献した。

3) 春日井市の第五次総合計画の平成25年改定で「誇れる歴史と文化」はなしとしていたのが、個性的な観光開発が期待されるとした。個別の商業者の取り組みに対し、区や町内会、まちづくり団体やボランティア組織等の幅広い団体の協力が不可欠(エリアマネジメント)とした。(4) 旧国鉄中央線のトンネルを保存し、市民に公開する運動が、「中央線敷設の歴史と遺構保存」が「産業遺構保存」の先鞭をつけた。(記録：塚田 忠雄)

OPINION

『ふるさと春日井「まちづくり」の風景』

—本質論を踏まえた「地域活性化」とは—

4年間に渡って「ふるさと意識なくして地域活性化なし」をコンセプトとして、地域（ふるさと）の活性化のための意識醸成活動として、春日井地域の魅力・特色を数多く紹介する実践活動を続けてきました。今回、中間報告「実践報告論文」としてまとめました。佐々木政司氏（修文大学健康栄養学部准教授 専門：教育学・社会心理学、一宮市町・人・しごと創生推進会議委員・座長、一宮市6次産業化・地産地消推進協議会委員・会長）を主査とする他の紀要編集委員の先生方の査読を経て「修文大学紀要 Number8」に掲載していただきました。

論文の「要旨」は以下のようなものです。

An Essential Method for Local Revitalization

—Furusato Kasugai Studies in Practice—

Kiyoshi Kawachi

要旨 地域振興・地域活性化の基本的考え方とは何か。「ふるさと」概念と「地域創生」「地域再生」とはどのように関連しているのか。従来の「まちづくり」概念と新しい発想による「まちづくり」の発想とはどのように違うのか。「地域活性化」の方法を巡って今日まで多くの先行事例や先行研究が提起されてきている。しかし、定式化した実践や理論は示されていない。従来の経済理論だけでは「地域活性化」の方法を定式化してゆくことは出来ない。特定地域の歴史、文化、自然を総合的な視点で捉える価値観と、地域を構成している人々の内発的意識（ふるさと意識）の醸成の基盤の上で「地域活性化」の問題を考察することが本質的方法ではないかと考えるからである。本論文は、市民活動「ふるさと春日井学」研究フォーラムの実践活動を通じて「地域活性化」の要件となる証言資料、実践的知見、検証等をもとに、「地域活性化」の本質的方法論を試論した実践報告論文である。

キーワード：「ふるさと意識なくして地域活性化なし」

地域活性化 ふるさと学 ふるさと意識の醸成

論文査読に対するコメントは、以下のようなものでした。

河地清 氏 の 「地域活性化」の本質的方法試論－「ふるさと春日井学」研究フォーラム実践の検証－ の査読結果について

本論文は、ふるさと意識が地域活性化においてどのように機能するかについて、「ふるさと春日井学」研究フォーラムの実践活動の中から検証しようとしたものである。特に、公中心の従来の経済中心の地域活性化策に対して、ふるさと意識による住民自身による活性化を取り上げており、地方創生等、地域の活力・活性化が叫ばれる今日において本論文の意義は極めて高いと言える。

ふるさと、地域を空間的な捉え方だけでなく、住民の文化的精神的所産として、その醸成過程をフォーラム活動から検討している。その中では、ふるさと意識による地域活性化の他地域での先行事例の研究や、歌謡史におけるふるさと意識についての検討、なども含めながら、住民によって春日井市の自然と歴史を掘り下げて、地域再発見、地域再生を発信しており、その活動効果として、商店街活性化策や歴史資産の保存などがあげられている。今後、本論文のタイトル通り、地方創生の方法論の一資料としてインターネット等を利用した今日的な展開も期待したい。

以上の点から、実践報告としても、また、実践提案としても価値が高く、掲載が適当であると判断できるが、論文の引用、注の書式に関する書式において、執筆要綱に沿う形への変更を条件とする条件付き採録が適当であると判断した。原則として、現在の本文中注については、引用として処理するもの、本文中に記載するもの、などに分けて処理が適当であり、また、図表等も本文中に含めるものはそのように処理されたい。

修文大学 健康栄養学部 佐々木政司

本質論を踏まえない実践や理論は、技術論や戦略論に終始したり対処療法的論理に陥り易く、やがては破綻してゆきます。今日のエネルギー政策（原発問題）の議論、ふるさと納税の行き詰まり等はその典型ではないかと思います。

「ふるさと納税」の発想は、地域活性化対策の視点からは見事な知恵の具現化でした。当初はふるさとへの納税が文字通り本質を踏まえた、「ふるさと意識」に基づいた、「我がふるさと」への純粋な応援活動（寄付）として行われていたと思います。しかし、何時しか「ふるさと意識」は、通信販売の消費活動手段となり、必ずしも「我がふるさと」への応援でなくてもよくなりました。消費拡大を目的とした、物品販売の「ふるさと市場」と化してしまいました。純粋な「我がふるさと」への思い（応援寄付）は、市場原理の中に見事に吸収埋没してしまった感があります。「ふるさと納税」の本質とは？今一度本質的原点「ふるさと意識」に立ち返って見直す時ではないでしょうか。（文責：河地 清）

次回

第 51 回

「ふるさと春日井学」研究フォーラムの ご案内

「ふるさと春日井」の魅力を再発見する FORUM

「ふるさと意識なくして地域の活性化なし」

「地域活性化・まちづくりの応援メッセージ」

Forum for Furusato Kasugai Studies

Forum テーマ：

『ふるさと春日井亜炭鉱山の歴史』

一戦前・戦間期の国策エネルギー産業を中心として一

日 時：平成 29 年 5 月 7 日（日） 午後 1 時 3 0 分～3 時 3 0 分

場 所：市民活動支援センター（ささえ愛センター）八幡小学校西側

TEL：0568-56-1943（〒486-0837 春日井市春見町 3 番地）

講 師：塚田 忠雄 氏（「ふるさと春日井学」研究フォーラム副会長）

フォーラム内容：戦前戦後重要なエネルギー資源として、国民生活での家庭用燃料でもあった亜炭（岩木）

鉱は、松本地域を中心にして盛んに採掘生産されていました。国策でもあった生産活動は、
石炭と共にエネルギー産業の重要な柱でもありました。現在は、全て廃坑となっておりその
全容ははっきりとはしていません。・・・・・・後は FORUM で

（非会員の方のみ資料代 500 円徴収させていただきます。）

※事務局：〒486-0825 春日井市中央通り 2-9 TEL・FAX0568-82-5973 会長 河地 清

mail address:kawachi-k@mb.ccnw.ne.jp

かすがい市民活動情報サイト：<http://kasugai.genki365.net/>

ふるさと春日井学検索 